１．実施概要

（１）日時：平成２４年１１月１８日（日）　１３：３０～１６：３０
（２）場所：響のホール
（３）テーマ：「中心市街地活性化に向けて　～いま、取り組むべきことは～」
（４）進行

13:30～13:35　開会
・開会の挨拶　福井市長 東村 新一
13:35～14:05　福井市景観賞２０１２表彰式
・講評 福井大学大学院工学研究科教授 選考委員長 白井 秀和
14:15～15:05　基調講演
・都市計画家 西郷 真理子
15:15～15:25　施策紹介
・内閣府地域活性化推進室次長 横山 典弘
15:30～16:30　パネルディスカッション
・コーディネーター：福井工業大学建築生活環境学科教授 内村 雄二
・パネリスト：西郷 真理子、合資会社開花亭代表社員社長 開発 毅、
福井大学ＥＭＰ実行委員会代表 松浦 麻衣、
福井市特命幹兼都市戦略部長 越智 健吾
16:30　閉会

２．開会の挨拶

- 中心市街地という言葉を使った施策が色々と登場してから久しくなるが、人口の減少とか少子高齢化とかまちを取り巻く環境が変わってくる中にあって、そういう実感が日に日に新たになってくるにつけ、中心市街地という位置付けもまた大きく変わろうとしている。福井市においても中心市街地、また広く市民の皆様とお話をしながら今後の在り方について検討を重ね、第一次基本計画も終わろうとしている。まだまだ進捗が不十分だという反省を踏まえ、第二次基本計画の策定にも力を入れていかなければならない状況にある。
- 今日は全国の再生に力を入れておられる西郷様の基調講演で色々な考え方が聞かれると思うし、横山次長からも全国の状況などについてお話いただける。また、パネルディスカションもあり、これからの福井がどうあるべきかということについて聞いていただき、意見を言っていただくことが、これから重要ではないかと思うのでよろしくお願い申し上げる。この後、福井市景観賞２０１２の表彰式もあるが、表彰を受ける方には是非おめでとうございますと、この間の取組みに感謝申し上げる。また白井先生をはじめ選考委員の方々に大変御苦労をおかけした。素晴らしい選考をしていただき感謝を申し上げる。

３．福井市景観賞２０１２表彰式

※各賞の表彰の後、選考委員長白井秀和氏より総評が述べられた。

４．基調講演

≪まちの再生　～ライフスタイルのブランド化による地域活性化～≫

- 日本は２０世紀の初めに５０００万人だったが、２２世紀の初めに５０００万人に戻るという政府の推定がある。どこかで横這いになるだろうが現状は減少の兆しのみということだ。お手伝いしている被災地もそうだが、全国でも経済は停滞し、雇用は減少し、地域社会そのものの結束力の低下、地域文化の衰弱など多くの問題を抱えている。これは人口が増えることをあてにして色々投資が始まってくるという道筋だった。
- コンパクトに都市をつくるということが必要で、それには土地利用の集約化が必要だ。もう一つは生活スタイルに依拠した新しい文化を創出すること。これを掛け合わせることで、上手なスマートシュリンクが成り立つではないか。そういうことで、幾つかのまちで中心市街地の皆さんと一緒にチャレンジしてきたということだ。地域資源を活かすと言われるが、それは何かというと、私は殆ど歴史ではないかと考えている。
- 川越市の場合は、１９８３年に「川越蔵の会」というものをつくったのがきっかけになった。ナショナルトラスト運動が日本に紹介され、住民の方がお金を集めて保存していくのが可能だというのを知り、自分達もそれを目指そうとなった。景観を保存しながら活性化しようとなった。まちづくりのルールとそれを運営する仕組み、意欲ある人たちがスタートするまちづくり会社という２つのソフトが大事だろうとことで「町並み委員会」を発足させた。そして商業でも住居でも、上手に「中庭」をつくるということをルールにした。このようにして、まちの良さみたいなものを「まちづくり規範」として皆さんで確認して、お店を直していった。
- 長浜の黒壁は有名かと思うが、教会の取り壊しにあたって市民が立ちあがり、小さいながらも複合開発した。敢えてガラスということでベネチアまで買い付けに行って始まった。レストラン、ミュージアムというのを入れたことが成功の秘訣ではないかと思う。空き家、空き店舗もあったがどんどん借りて直していった。黒壁、新長浜計画といったまちづくり会社や市民など１つのプロジェクトに色々な人が参加して成功している。また、高松の場合は、デ

ザインコードをきちんとつくって地区計画という手法に載せてやってきた。道路を広場にということ。再開発と一緒にやることで広場の様に使うということを消防や警察と協議しながら、美しいまち並みをつくっていこうとした。

- 世界の都市開発の会議で最優秀賞を貰ったわけだが、それは考え方で、情報は上を向いたら降りてくるんじゃなくて、上に吸い上げられてしまうという構造から横の繋がりをもっていくということがとても大切だ。それからまちづくり会社が主体となって始めていくということ。その２つで評価を貰ったということだ。住民主体のプロジェクトであること、ヒューマンなデザインであること、地域の文化を継承していくこと、これが評価されたということだった。

５．施策紹介

≪中心市街地活性化の全国的な動きについて≫

- 最初は商業調整という形で大店法という法律に基づいて中小小売業、サービス業の健全な育成を目的に大型店舗の立地規制をやっていた時代があった。それが内外の指摘で平成１２年に廃止になり、その後大店立地法という法律で生活環境の保全ということでの規制に衣替えした。その時、旧法の中心市街地活性化法、都市計画法と併せてまちづくり三法となった。平成１８年頃に議論が行われ、中心市街地活性化法の抜本的な見直しがされて、従来は省庁が寄り合いでやっていたものを、内閣官房に中心市街地活性化推進本部を置いて連絡調整を包括的に行うようになった。また、内閣総理大臣の認定制を敷いた。更に中心市街地活性化協議会を置いたり、色々な施策の中で「まちなか居住の推進」が入ったり、そういう改正が行われたのが平成１８年だった。
- その後、新法になってから認定されたのが１０７の市で、１１８の計画が進められている。二期目に入ったのが８つある。北九州市のように同じ市で２つの計画がある市もある。春に取りまとめられた再生戦略の中で中心市街地活性化の在り方について再検証をしようと閣議決定でいわれた。その一つとしてリレーシンポジウムを企画した。もう一つは、有識者による見直しの検討委員会を立ち上げた。経済産業省でも委員会が立ち上がり今２つが走っている。
- 規制改革について誰でも提案ができて、本則を変える前に特定の地域で社会実験的に特例措置をやってみようというのが構造改革特区。新政権で唯一できたのが総合特区だが、高松の事例もこの特区の一つとして指定されている。また、環境未来都市、環境モデル都市の様な取組みもある。経済産業省では、魅力を高めるアイデアの掘り起こしをする先導的で収益性の低い事業を補助する仕組みや成功事例・失敗事例などの情報交換、人材育成をしようという支援がある。国土交通省でもハードを中心にきめ細かくあり、先程のまちなか居住の推進

も含まれているし、身の丈再開発の推進等がある。総務省のものは、ソフト事業やハード事業に対して、一定の要件を満たせば交付税措置の対象にしようとするものだ。

- また、政務と議論していく中で出てきたものだが、コンパクトシティという集約化の道をたどるのか、引き続き開発ということで外への拡散を進めていくのか、かなりはっきり選択をしていかなければならないのではないかということだ。人口のピークも下がって来ている中で、これまで日本が体験してこなかった様な対応が求められる。構造的にも抜本的に変えていかなければならない。

６．パネルディスカッションの概要

- （コーディネーター）まず福井市の第二期中心市街地活性化基本計画のご説明をお願いします。
- （越智戦略部長）第二期基本計画では、「出会う」、「暮らす」、「遊ぶ」を基本方針に掲げている。「官民協働のまちなかにぎわいステージづくり」というテーマを新しく掲げたわけだが、市民のイベントが根付いてきた。また、公共投資のスケジュールが明らかになってきたので民間投資の誘発も期待しつつ、第二期計画を進めていきたいと考えている。「出会う」については、福井駅を中心とした交通・交流の場の整備。「暮らす」では、商業地の中心地を含めたまちなか居住の推進。「遊ぶ」では、この中心地を核に広げていくということでハードだけではなくイベントなどのソフトも考えている。これらの目標に対して指標を設けて進めていく。推進体制も中心市街地の方々のみならず広く関心を持っていただきたいと考えている。
- （開発社長）２７歳の時、住んでいる地域をどんなまちにしたいかと福井新聞社からインタビューを受けた。その時、私は金沢にあるような茶屋街にしたいと夢を語っていた。それをコンピュータグラフィクスで加工したものを一面に載せていただいた。石畳のまちが実現されているのを見て、地域でなんとか社業をやりながら実現してみたいという思いが湧き上がってきた。しかし、料理屋はどこもつぶれて大変厳しく、自分だけ生き残っても次の１００年はないのではないかと考え始めた。私も新館をつくり活性化させようとした時にリーマンショックが起きた。大変さを肌身で感じている。今はＮＰＯで地域活性化を模索させていただいている。
- （松浦代表）私達は駅前活性化を目標に、自分たちのまちを活気づけようと活動している学生団体。１年目は福井駅前の活性化プランを考えるイベントやまち歩きも行ったりした。２年目はまち歩きツアーを行ったり、フリーペーパーを発行したりした。「歩きたくなる駅

前」をコンセプトに活動しているが、若者から子供たちへと対象を広げて活動した。率直な意見としては食や遊びが点々としていて、ついでに何処かへ行こうというのがあまりない。まとまっていないというか、その辺が課題に思う。

- （西郷先生）人材が素晴らしいと思う。まちに対する思いをもった人がいる。一方で都市をどうつくっていくかに関してはもう少しイメージを共有しなければと。新幹線は人を吸い上げていくもので人を連れて来ない。交通が発達するとパワーがある所に吸収されてしまう。そういう意味でも魅力ある都市がつくれるのが福井だと思う。素晴らしい歴史もあるし、都市の骨格みたいなものをつくりあげれば。例えばメインストリートなど。
- （越智戦略部長）駅の近くにお城があるのは全国でも片手ぐらいではないか。また、市役所や県庁があり、それ以外の業務・商業機能は非常に狭い範囲に固まっている。集積しているという感覚だ。また、公共交通など先人の努力で色んなものが残っているのがまちの特徴だと思うし、強みだと思う。全国ランキングでは幸福度１位で、お金や時間もあるが、それを使うところがないのではないかと個人的には感じている。
- （松浦代表）ＥＭＰは３年目になるが、まち歩きとフリーペーパーの発行を２本柱に活動している。福井の魅力を見出し自らの言葉で語れる子供たちを育てようというのが目標で、今年度は４回連続でワークショップを行った。１回だけだとその時しか賑わいがつくれない。まち歩きでは、地元の方々にガイドをしてもらい、教科書や学校だけでは知ることのできない地域に密着した歴史を学んだり、地区の大人が頑張っている姿を見てもらった。感じたことは“人”が強みということ、また郊外と同じものではなく駅前にしかないものをつくる、子供たちがふらっと遊べるような場所がないので、家族と一緒に楽しめるような駅前づくりがいいのではないかと思う。
- （開発社長）地域や商店をタマゴに例えると、昔はタマゴが地域のコミュニティにきちんと支えられていた。風雪が続く厳しい時代が続き、土がはがれて何処かへいっちゃったと。これが地方都市の現状ではないか。もう一度上から土をかけて覆いかぶせない時代で、もうタマゴが強くなるしか方法がない時代だ。私共が地域のＮＰＯでやらせていただいているのは、実は個店力を上げるための事業。インターネットを使ったり、イベントを仕掛けたりして自分自身をさらけだすことを前提として、流行ってるお店、企業は実際ある。別にノスタルジックに語る必要はなく、今こうなんだからじゃあどうするかということを考えていけばいいのが実情ではないかと思う。
- （西郷先生）幸福を感じるものの中で、ひとつは食べ物。福井が持っている一つのパワーではないか。ライフスタイルのブランド化というのは、そこに住んでいる人達が生活していることがカッコいいものを見つける。福井に住んでいる人達が普通に食べてるものが外から見たらすごく美味しい。食べ物が美味しいということは、福井には素晴らしい文化があるということではないかと思う。高齢者が増えてきても、その人たちが住みやすいまちをつくると、子育て世代が住みやすくなる。子供がもう一つのキーワードだ。その２つでライフスタイルのブランド化ではないかと思う。

※この後一般来場者からの意見・質問等を受付け、出席者より回答があった。またコーディネーターよりまとめの言葉があった。

７．閉会